

■活動記録

2021年度地域情報研究所活動記録および状況について —所属大学院生による報告—

堀池航洋*

立命館大学政策科学研究科博士後期課程2回生／地域情報研究所所属院生

本稿の目的

本稿では、2021年度の地域情報研究所の主な活動と、大学院生および若手研究者にとって地域情報研究所へ所属することの意義について、昨今の状況を踏まえつつ所属大学院生の視点から報告を行いたいと思います。

2021年度地域情報研究所の主な活動について

まず、2021年度の地域情報研究所の主な活動を整理したいと思います。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により多くの活動が制限されましたが、昨年度実施することができなかった、地域情報研究所内のさまざまな研究プロジェクトに対する理解を深める試みとして、プログレスレポートが開催されました（表1）。

第1回プログレスレポートは2021年7月13日に開催され、藤井えりの先生（岐阜協立大学経済学部准教授）による報告が行われました。大阪府中央区の「ミナミ」を事例として、社会的孤立が生じやすい外国人住民に焦点を当てながら、社会サービスの不足の実態と自治体と地域コミュニティが社会サービスのあり方において果たしうる役割について、財政学・地方財政論の観点から検討が行われました。また、2021年12月17日に開催された第2回プログレスレポートでは、今年度より運用が開始されました地域情報研究所NEXTフェロシップ生^[1]の陳暁雪さん（立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程1回生）により、自らの感情を生起させるストレスに対する意識的・無意識的に行われる認知面からの対処（＝認知的感情制御）における文化的な差異および時間性について報告が行われました。

両報告は、対面およびオンラインライブ（ZOOM）によるハイブリッド形式にて行われ、報告後は学際的視点から活発な議論が交わされました^[2]。浅識の筆者には報告内容はとても新鮮であり、その後の議論との双方から大きな刺激を受けました。

* 筆者は立命館大学政策科学部から大学院政策科学研究科博士前期課程、同博士後期課程へと進学しており、後期課程に進学した2020年4月から地域情報研究所に所属しています。

	日時	開催形態	報告者	テーマ
第1回	2021年7月19日（火）	ハイブリッド形式	藤井 えりの （岐阜協立大学経済学部准教授／ 地域情報研究所客員研究員）	社会的孤立と社会サービス —外国人住民と地域共生—
第2回	2021年12月17日（金）	ハイブリッド形式	陳 暁雪 （立命館大学大学院人間科学研究 科博士後期課程1回生／地域情報 研究所NEXTフェローシップ生）	認知的感情制御における文 化差と時間性
第3回	2022年2月15日（火） （予定）	ハイブリッド形式	豊田 祐輔 （立命館大学政策科学部准教授）	防災分野におけるゲーミン グ・シミュレーションの活 用

表 1 2021 年度プログレスレポート

出所：筆者作成

筆者を含め、自らの研究に追われ他の研究方法や研究手法、あるいはテーマに目を向ける余裕の少ない大学院生にとって、このような機会はきわめて貴重であると感じています。とりわけ、学際的な議論に身を置くことは自身の関心の窓を広くひらく機会でもあり、議論を通じて研究者としての学際的視点を養うことで、ひるがえって自身の研究の有用性、新規性、学術的貢献を見直し、またそれらの発見につながると考えられます。

大学院生を取り巻く昨今の状況

こうした学際性は大学院教育においても重視されており、その充実が進められています。地域情報研究所が拠点とする立命館大学の大学院教育では、複数教員による指導を基本としたプロジェクト型の研究指導が採用されている場合が多く、大学院生は研究を進めるにあたっては自身の指導教員からの研究指導を受けながら、同時に異なる分野・視点からのコメントや指導を受けることができます。

また、大学院生が利用する研究室については、基本的にはキャンパスごとに各研究科に所属する大学院生による共用型（共同研究室）であり、例えば博士前期課程（修士課程）の共同研究室の場合は、おおよそ 80 名程度が同時に利用することが可能です。そのため、大学院生同士、あるいは大学院生と教員とのあいだでのコミュニケーションが比較的取りやすい環境であると思われます。そして、筆者が所属する政策科学研究科では、7 割の大学院生が海外からの留学生であり、そのうち 8 割ほどが日本語未履修の大学院生であることから、外国語でのコミュニケーションを取る機会にも恵まれ、筆者のような日本人大学院生の研究能力向上には適した環境となっています。

他方で、昨今の新型コロナウイルス感染症の流行にともない、こうした環境は裏目に出ているように感じています。研究を遂行するにあたり大学院生が利用可能な資源は限定的です。広義の研究資源には、研究テーマに関するデータ・資料・ツール、研究室や電子機器をはじめとする研究設備、そして調査などにかかる研究費などがあげられますが、それに加えて、大学院生間あるいは大学院生と教員・研究者間のコミュニケーションも、大学

院生にとっては重要な資源であると考えられます。

しかしながら、上記のように多数の大学院生が肩を並べながら入れ替わり利用する共同研究室では、どうしても感染症拡大のリスクが高い状況となってしまいます。そのため、共同研究室についてはその利用を停止もしくは制限せざるを得ないこととなりますが、この場合、多くの大学院生はさまざまな研究資源の活用が困難となり、研究の遂行において非常に大きな障害となりました。おおよそ2年から5年の在籍期間で入れ替わりが起こる博士前期・後期課程では、研究資源の活用機会の確保が重要な課題となっています。

地域情報研究所におけるコミュニケーション

筆者の場合も、博士後期課程入学と同時に共同研究室などほとんどの研究資源の利用が制限され、研究活動に大きな支障をきたしました。また、行動規制が緩和されいわゆる「with コロナ」へと移行した後でも、そうした研究活動上の間隙は研究の進捗の遅れ、あるいは研究のリズムという面において、非常に大きな影響を及ぼしているように思われます。とりわけコミュニケーション機会の喪失は、研究活動だけでなく、孤独な気分になりやすい大学院生にはメンタルヘルスの面でも大きな負担となりました。

ここでのコミュニケーションは、自身の研究領域に関するものに限らず、さまざまな研究領域における多様なテーマについての議論、あるいはプライベートな話題や雑談などを指します。それらは必ずしも自身の研究や論文執筆を進捗させるものになるわけではありませんが、若手研究者にとって非常に重要となる、ある種の「教養」を豊かにするものであると思われます。また、自身の研究計画や研究のフレームワークといった研究活動の基礎となる部分について、他の研究者とのディスカッションにもとづくブラッシュアップを行う機会となります。こうした時間や機会は大学院生や若手研究者にとって極めて重要であるにもかかわらず、コロナ禍においてはそれらが得づらい状況にあると思われます。

こうした状況下で、プログレスレポートの開催をはじめとして、新型コロナウイルスの感染状況を鑑みながら柔軟にご対応いただけたことは³⁾、筆者にとってとても幸いなことでした。研究活動中のちょっとした隙間やコーヒープレイクの時間には、所長の森裕之先生はじめ、江成穰先生（松山大学講師、2020年度までは大学院生として所属）や、藤井えりの先生（岐阜協立大学准教授）、南慎二郎先生（立命館大学政策科学部・政策科学研究科授業担当講師）との議論や雑談などを通じてコミュニケーションを取ることができました。

学会報告など、いわば“ON”の状況で交わされる議論とはことなり、こうした“OFF”の状況で交わされる議論は、よりナマの議論となります。つまり、準備された研究報告ではなく、ある種アドリブ的に自身の研究をアウトプットし、それに対する突っ込んだ議論が展開されることによって、論理的一貫性を見直しや新たなアイデアの発見、あるいは自身の考えをまとめるきっかけとなり、研究の行き詰まりを脱することにつながります。これが筆者の研究活動において、とても重要な部分であると痛感しました。

こうした議論を日常的な研究活動のなかで行うことのできる環境が整っている点は、地域情報研究所の大きな利点であると考えています。加えて、自身のキャリアパス形成やメンタル面などをはじめとして大学院生が直面するさまざま課題について、気軽に相談ができる点も非常に有益であると思われます。

地域情報研究所の意義と今後

ここまで、所属大学院生の視点から地域情報研究所の活動を整理しながら、所属大学院生および若手研究者にとっての意義を述べてきました。また、極めて個人的・個別的な体験談にもとづきながら大学院生を取り巻く状況についても述べました。

新型コロナウイルス感染症は変異種の発生により拡大を繰り返しているなど、依然として研究活動にさまざまな障害がありますが、私は幸いにも日本学術振興会特別研究員（DC2）の採用内定を得ることができました。これには、研究指導教員である重森臣広先生（立命館大学政策科学部教授）からこれまで頂いた厚いご指導やリサーチプロジェクトでの先生方から頂いたご指導に加えて、地域情報研究所での活動も非常に大きな要因であったと感じています。とりわけ、先述した地域情報研究所内でのコミュニケーションを通じた議論や研究のブラッシュアップが大きな要因となったと考えます。

他方で、研究活動上の障害や行き詰まりに直面している若手研究者や博士後期課程も依然として存在していることから、今後もさらなる若手研究者・博士後期課程生の追加による所属研究者の多様化が期待されます。

おわりに

本稿で触れたプロGRESSレポートの日程およびオンラインライブアクセス用アドレスなど、地域情報研究所の活動は下記 URL から地域情報研究所ホームページよりご確認ください。また、地域情報研究所に関するより詳細な情報やご質問につきましては、メールアドレスから事務局にお問い合わせください。

地域情報研究所 HP :

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/rdiri/>

地域情報研究所事務局 e メールアドレス :

rdiri@st.ritsumei.ac.jp

註

- [1]文部科学省「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェロシップ創設事業」の採択を受けた「立命館大学 NEXT フェロシップ・プログラム」にもとづくフェロシップ生のこと。地域情報研究所はその育成拠点として採択されました。
- [2]本稿執筆時点（2022年2月1日）では第2回まで開催されており、第3回は2022年2月15日（火）に開催されます。
- [3] また、地域情報研究所においては、研究所内のデスク等の配置上対面ではなく、十分な間隔をあけることができ、適切な換気を行うことで、「3密」の状態を回避できました。